

奥谷 カレルの評価については、今おっしゃられた通りでございまして、様々な矛盾する側面もありますし、社会学や経済学に対する評価が低いとか、歴史学に対してはかなりひどい言葉使いをしているとか、いろいろ問題はあります。75ページの下の方にも書いておきましたけれども、カレルにたいする過大評価はやはり禁物で、慎重に評価する必要があるだろうと思えます。それから、私が人間の科学をどういう基盤の上に乗って総合し展開していくかというきわめて根本的、本質的な問題については、残念ながら今の時点ではお答えできません。これからの課題として追求したいと思います。ただ、中野先生の今のご質問は、中野先生ご自身にそのままお返ししたいという気もするというのを付け加えさせていただきます。

司会 どうもありがとうございました。時間の関係もございまして、奥谷さんのご報告と質疑はここまでさせていただきます。

次に細見さんをお願いしたいと思います。細見さんは、「哲学と人間学—アドルノの経験に即して—」ということで、アドルノのゲーレン批判が1つのポイントになるとお聞きしておりますが、よろしくお願い致します。

細見和之「哲学と人間学—アドルノの経験に即して」

細見 大阪府立大学の細見和之と申します。最初からお断りをしなければなりません。最初この発表のタイトルをお伝えしたときに、今ご紹介いただいた通りのことを考えていたんですけども、もう少しアドルノとハイデガーを対照させる形で問題を考えようと思えます。アドルノとハイデガーということになります。決して、哲学がハイデガーに対応して、人間学がアドルノに対応しているというわけではありません。アドルノとハイデガーという、人間科学全体からするとそれ自体非常に限定された小さな領域での議論ということになるかもしれません。ずっと私自身大学の人間科学部におりましたが、今奥谷先生の報告の中にもありましたように、総合化と専門化がいつも矛盾するという思いをしています。そして、学生に対しても僕らはいつも非常にジレンマに立たされるという問題に直面していると思うんですけど、その総合化と専門化の一見矛盾する問題を考える上で、アドルノとハイデガーの振る舞い、または方法の差異の中にあるジレンマを抜け出すという問題があるんじゃないかと思っているわけです。

つまり、僕らは総合というときに、あるいは総合化と専門化の矛盾、ジレンマというときにある専門化された領域の個別的な併存と申しますか、前提を風呂敷のように包み込む総合化というものを考えたりします。あるいは、その個別の専門領域を導いているロジックの中から抽出できるある抽象的なロジックまたは原理というものは、例えばそれが行動心理学の場合には人間のビヘイビア、とか、それを導いている何か身体的な過程だとか、生命のプロセスだとか



そういうものになると思うのですが、そういう個別の専門学科を前提にして、それを包み込むような総合化、あるいはそれに対して個別の専門学科をさらに統一して、すべてを統合しているような何かの原理を探しています。私が言いたいのはこれとは違う方法です。例えば、アドルノの思想の中に出てくる方法を参考にできるのではないかとことです。

つまり、こういうことです。私たち

自身それぞれは、一種の専門領域に携わる研究者として個別的な研究を主としてやっているけれども、その個別的な研究自体がたえず個別的な領域を逸脱していく、あるいは越境していく、そういうことが事実私たちの研究の足元で常にすでにおこっているのではないかと思います。その個別的な専門領域の中で、研究を続けていく中で、絶えず何か既存の研究領域から逸脱したり、越境したりしていく。そういう経験とか体験の中にある総合があるのではないか。総合といいますが、一元的な原理での総合とか風呂敷のように包み込む総合とは全然異質ですけども、ある総合の影といいますか、総合の痕跡といいますか、総合の破片といいますか、そういうものが散在していると思います。個別の領域の中に様々な、それこそ個別的な形での越境とか逸脱の経験があって、その中にある総合の影といいますか、破片といいますか、それを再び完成された総合化という形でもっていこうとすると非常に無理な力が働いてしまう。いつかは、そういう破片・痕跡の中からさらに何か統一的な原理にぶつかるということを考えることは不可能ではないかもしれませんが、そうではなくて、その個別的な領域の中の一つの逸脱とか越境という所の中に、何か総合と専門化の矛盾とかジレンマとかいうものを少し違う角度から見られるようなことができるのではないかと、僕はと考えたわけです。

僕のこれから行います報告は、かなりラフなものになります。お許し下さい。普通の学会発表でしたら、あまり自分のことは話さないと思うんですけども、こういう場所ですから、少し自己紹介めいたことを話しておきます。先程申しましたように、私は大阪府立大学という所で教えておりますが、私が教えておりますのは、主としてドイツ語です。私はドイツ語の教師をしています。私がいるのは総合科学部という所ですが、これはもちろんかつての教養部が改組されたものです。学部の学生も独自に抱えています。この改組は、昨今行われています他大学での改組と比べると比較的早い時期に行われていまして、ずっと1学部1学科制できたんですが、この4月から5学科制に移行しました。いわゆる文系の2学科と理科系の3学科がありまして、私はその中で総合言語文化学科という所に所属しています。この学科の教員の多くは、

従来の言い方で言いますと、語学教師です。英語、ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、ロシア語の語学があります。私の所では、中国語、朝鮮語、ロシア語が卒業単位になっています。91年11月に就職しましたので、6年くらいここで教えているということになります。さらにさかのぼりますと、僕が卒業した大学は大阪大学の文学部の哲学科です。大学院は、大阪大学の人間科学部という所に進学しまして、学部から修士課程まではヘーゲルの『精神現象学』を読んでいました。今奥谷先生の報告の中でお名前が上がりました徳永先生に大学院で教わりまして、博士課程からはフランクフルト学派、とりわけアドルノとかベンヤミンの研究をやっていました。結局8年くらいアドルノに集中して携わっていたわけですが、それで昨年の夏に『アドルノ』という本を出しました。これは講談社から今出ています「現代思想の冒険者たち」という入門のシリーズですが、その1冊としてこの本を書きました。

最初に言いましたように、主としてドイツ語を教えているわけですが、やはり専門の授業も1コマとか2コマ回ってきます。さらにそれ以外に、複数の先生でやる総合科目というのがあります。その中では、例えば都市論とか「文化と共存」というようなテーマを掲げまして、半年間は講義をして、後の半年は演習形式で授業をするなどしています。

大学に入学しようとする高校生とかあるいは予備校生にとって、とりわけ文系志望の高校生にとっては、人間科学部あるいはこちらにあります人文学部とか、あるいは私たちの総合科学部という名称が大変魅力的だろうと思っております。僕自身は文学部を選択したことになりますけれども、今は文学の魅力というのは、学生の中では圧倒的に凋落しておりまして、大学に今入学しようとする高校生・予備校生にとっては、人間科学部とか総合科学部、あるいは人文学部といった名称は大変魅力的であって、私のころよりそれはさらに増しているだろうと思います。実際、私が所属しています総合科学部の学生たちも、そういう魅力を少しはもって入ってくるようです。それでも実際入学した学生たちの多くは、その人間科学部とか、総合科学部という所で幻滅を味わうようです。

つまり、そのときに学生が1番言うのは、やはり総合性という看板に偽りがあるのではないかということです。先ほど言いましたように、教えている教員の側というのは、やっぱり従来の専門分野の枠内で研究してきた人たちが大半ですし、1つひとつの授業っていうのはどうしても専門色の濃いものになっていくわけです。しかも実際、ある程度従来の意味での専門性をもたせないと学生側が卒業して就職していくときなどに、いったい大学で何をやってきたのかということが説明しにくいということだって、現実問題としてあるわけです。しかし、人間科学部とか総合科学部というものもっているはずの総合性に学生が幻滅を覚えるときに、そこには単に個々の授業で専門色が濃いという不満だけがあるのではないと思います。つまり総合性に主眼をおいた総合科目においても、別の意味での不満が出てきます。

これは、私があくまでかかわった総合科学の範囲内でのことで申し上げますけれども、つまり文系や理科系の様々な先生が毎回入れ替わり立ち替わり現れまして、様々なことをそれぞれ

の立場から講義します。それらは確かに都市とか生命とか文化をテーマにして一貫してはいるんですけれども、毎回違う話です。これは、実際私たちの都市論というテーマにした総合科目でこんなふうにしていたのですが、例えば1番最初にギリシャ哲学の専門の先生がギリシャのポリスについて語る。エチオピアを舞台にしてフィールドワークをしている文化人類学の先生が、今度はアフリカの都市を紹介する。フランス文学の研究をやっている方が、フーコーの監獄の誕生とか凶器の歴史という本を下敷きにして、近代都市の諸問題を講義している。さらに工学部からわざわざ学内非常勤の形で都市工学の専門の先生を呼びまして、都市の緑地化計画について話していただくことになっています。ちなみにそのとき、私自身は村上春樹の小説を下敷きにしまして、「メディア都市の遠近法」という講義をしました。それらの講義を聞き終えた学生に対して、さあレポートを書きなさいと僕は言うてしまう。それで学生は非常に困惑をしてしまう。そういう現実があったわけです。これは私の所での非常にカリカチュアライズされたイメージかもしれませんが、そういうことが多かれ少なかれあるのではないかと思います。

ただし、私は必ずしもそのとき学生が幻滅感を覚えるということにすべて分があるとは思っていません。むしろ学生の側と教える側の両方に、最初に言いましたような総合性についての、漠然とした、しかし非常に固定的なイメージがあって、それが期待と幻滅の両方の原因になっているのではないと思うわけです。要するに、従来の文系的なるものに対して理系的なるもの、それらがそれぞれ実際のイメージとして強固に存在してしまっていて、その上でそれらを総合しようというのは、非常に壮大な夢ですけれども、それがどうも前提になっていないかなと思います。あえて言いますと、それはやはり非常に古めかしいヘーゲル主義的な夢ではないでしょうか。もちろん今の人間科学部とか総合科学部でヘーゲル主義的な総合とか統一が行われているということではないのかもしれませんが、私が自分の職場で感じる限り、ややそういう傾向がまだ残っているのではないかなと思います。

ちょっと前置きが長くなりましたけれども、これから最初に言いましたような本題に入りたいと思います。

アドルノがどういう所から自分の思想を出発させていったかを話したいと思います。アドルノは、1903年にドイツのフランクフルトという所に生まれた、ユダヤ系の思想家です。アドルノは、ユダヤ系ゆえに、ナチスに教授資格を剥奪されまして、ロンドンからさらにアメリカに亡命せざるを得ませんでした。しかも、彼の思想と人生はナチの、そしてヨーロッパの反ユダヤ主義に関わっていました。アンチ・セミティスムス〔反セム主義＝反ユダヤ主義〕との対決というものを非常に不可避の形で抱え込んでいました。アドルノの1番有名な言葉は「アウシュヴィッツの後で詩を書くことは野蛮である」という言葉です。アドルノにはホルクハイマーという彼より少し年長の友人がいて、この2人がいわゆるフランクフルト学派を代表する哲学者ということになっています。そのフランクフルト学派というのは不思議な特徴がありま

して、メンバーがほぼ皆ユダヤ系なんです。1930年代のことですが、最初はホルクハイマーがずっと指導者になりました。ホルクハイマーは、学際的唯物論というものを唱えて、この学派を導いて行きます。したがって学際性、つまりインター・ディシiplinaryニテートがこのフランクフルト学派の1つの代名詞にもなります。しかし、アドルノがフランクフルト学派の指導者となるのは戦後です。ホルクハイマーとアドルノの学際性あるいは総合性はかなり性質を異にしていると思います。最初の段階でアドルノとホルクハイマーは必ずしも思想的に一致していません。2人がアメリカに亡命したあとで、ようやく思想的な連帯が実現されてきます。その結果できあがったのが『啓蒙の弁証法』といわれる本です。これは、徳永先生が岩波から翻訳で出されているもので、アドルノとホルクハイマーが共同作業として書き上げた本です。

そういうアドルノの思想そのものの出発点を特徴づけた大事な講演があります。これは「哲学のアクチュアリティ」と題されています。アドルノがフランクフルト大学に私講師として就任したときの講演です。1931年です。その冒頭でアドルノはこう述べています。これは、アドルノのこの講演からの引用です。「今日哲学研究を職業として選ぶ者は、かつて様々な哲学的企てが出発点としていた伝統、すなわち現実的なものの全体を思考の力で捉えることができるという幻想を最初から放棄しなければならない。その秩序と形態があらゆる理性の要求をうち砕いてしまうような現実の中では、正当性を主張するいかなる理性も自らを再認することはできないだろう。認識するものに理性が現実の総体として自らを提示できるとすれば、すでにそれは論争的な仕方においてであって、いつかは正しく公正な現実に到達するかもしれないという希望を、理性はもっぱら様々な痕跡と破片の内にもみ認めるのである」。アドルノの文章は非常に長いので、1回ざっと読んだだけではわかりにくい文章かもしれません。

要するにアドルノが言っていることは、全体を理性で捉えるという前提は幻想であって、それをまず放棄しないと、哲学研究は職業としてやれないんだということです。では、すべて理性は存在しないとあきらめるのか。いやそうではない。そういう理性は、言ってみれば、あるべき理性はもっぱら様々な痕跡と破片の中に存在している。そこにはひょっとしたらいつかは正しく公正な現実、あるいは全体としての社会とか世界とか現実というものに到達するかもしれないという希望がある。そういう痕跡とか破片の中に、あるいはそういう形で希望があるんだというのがアドルノの出発点だったわけです。

そのときにアドルノが具体的に考えていた思想の形態というのは何かと言いますと、それは端的に言いますと、ヴァルター・ベンヤミンとかエルンスト・ブロッホたちの思想です。2人ともユダヤ系です。両方ともアドルノよりやや年長の人たちです。これは日本でもたくさん優れた本が出ている思想家・表現者です。アドルノはベンヤミンとかブロッホという思想家たちと当時実際に個人的に接触しながら親しんでいたわけです。つまり彼はそういう非アカデミックな評論家あるいは思想家たちの思想の中に可能性を見ようとしていたのです。ベンヤミンは、最後は悲劇的な自殺を遂げるんですけども、そこまですっと不安定な文筆業で過ごして

います。フランクフルト大学に講師就任を拒まれたのです。これはユダヤ系だからなどの理由ではなくて、書いている論文がわけ分からないということだったんですけれど。

それから、ブロッホもライプツィヒ大学の哲学教授になりますが、それは第2次世界大戦後のことです。この時点では、両者とも決してアカデミックな領域にいる人たちではありませんでした。

さっき引用しましたように、「哲学のアクチュアリティ」の最後には、痕跡と破片という表現が出てきます。そこには、ヘーゲル的な全体性としての知の体系、あるいは理性の体系という発想から、ブロッホやベンヤミンの思考へ転換していこうというアドルノの抱負がはっきり表れています。ブロッホ・ベンヤミンの思考というのはいったいどんなものか。これ自体、とても難しい問題ですけれども、例えばキーワードとしてアレゴリーとか判じ絵があります。判じ絵というのは謎絵です。絵の中に犯人はどこに隠れているというキャプション〔見出し〕がついていて、街の一角が描かれていてどこに犯人が隠れているかずっと探していると、その絵全体が1つの顔であることが分かるというものですけれども、そういう判じ絵や謎絵の謎解きなどを一種の思考的なモデルとする発想です。

アドルノは、こういうブロッホとかベンヤミンという思想家・表現者たちをモデルとしながら、一貫して対立的にイメージしていくのがハイデガーということになります。ちなみに生年で見ますとアドルノが生まれたのが1903年ですが、ハイデガーの生まれているのは1889年です。ハイデガーも非常に宿命的な人でして、ヒットラーと同じ年に生まれているんです。アドルノより14歳上です。

ハイデガーの話を少しします。ハイデガーの出発点はカトリックの神学研究でした。彼はフッサールの現象学を学びまして、そこからフッサールを越えた独自の存在論を打ち出してきました。1927年に有名な『存在と時間』という本が出されます。これは、とても哲学界に大きな衝撃を与えたと言われる本であります。その『存在と時間』という本は、ハイデガーが現存在、ドイツ語でダーザインという人間のあり方に即した分析を展開していきます。第1部第2編までという非常に暫定的な形で刊行されるにとどまったわけですが、1927年から1936年に至るまでハイデガーは、プラトン以来忘却されてきたという存在を問うための基礎的存在論から独自の形而上学の構想へ向かって行くわけです。しかもハイデガーの場合には、非常に特徴的なことですが、1927年『存在と時間』を出してから独自の形而上学の構想に向かっていく過程が同時にナチ加担と重なっているわけです。これは昨今繰り返し論議されている問題であります。きわめて乱暴な要約になりますけれども、ハイデガー哲学のこの時期の基本的動向は、次のような形になると思います。

基本的にプラトンとアリストテレスの概念によって規定されているキリスト教神学は、神の本質とは何か、神の属性とは何か、本質と属性の関係はどうなっているのだろうかを考えます。そういうものを考える中世神学は、基本的にプラトンとかアリストテレスの概念から影響を受

けているわけです。だからキリスト教神学を研究するには直接プラトンとアリストテレスのテキストに向かわないとしょうがない。プラトンとアリストテレスのテキストに向かいまして、そこで概念がどういうふうに揺らいでいるかを捉えたいということになります。そこからプラトン、プラトン以降のアリストテレスの概念の揺らぎの中に、プラトン以前、ソクラテス以前の存在経験と言われるものを掘り起こし、存在をどういうふうに捉えていたかを掘り起こしていくということをハイデガーはここでやったわけです。フッサールの現象学をてこにしまして、そういうきわめてアカデミックな哲学史的研究を新しい形而上学的構想へ向け直すことをやっていた。しかもそれが同時に彼のナチ加担とみごとに重なってきているという問題があるわけです。

しかも、最近の様々な研究が明らかにしていますように、ハイデガーにとってナチ加担というのは、彼の人生の単なるエピソードではなかったわけです。むしろ、非常に誠実なある思想的実践であって、自分の哲学をそこで実現しようという側面を疑いなくもっていたと思います。すでに『存在と時間』の中に、近代の分裂した諸学を新しく統合するというモチーフが書き込まれているわけですが、彼がナチの支配下で実現しようとした試みの1つは、まさにそういう自分の存在論による諸学の基礎付けであっただろうと思います。つまり、アドルノがアカデミックな領域に非アカデミックな思考をもち込もうとしていたのに対して、ハイデガーは一見きわめてアカデミックな手続きを踏みながら、それを越えた領域に突き抜けていったというふうに言えるかもしれません。もちろんナチ加担という事実を、一切をはかる尺度にすることはできません。ナチに加担したんだから、そういう人間の思想とか哲学は一切信用できないと言うことはとても間違いだらうと思います。アドルノはさらにハイデガーに対してきつい言葉をはいています。アドルノのハイデガーへの有名な文句です。「ハイデガーの哲学はもっとも内的な構成要素に至るまでファシスト的である」と、アドルノは激烈にハイデガーに対する指弾の言葉をはいています。しかし、そういうように批判する際のアドルノは、ハイデガーの事実としてのナチ加担を問題にしているのではない。極端に言いますと、実際にナチに加担していようがしていまいが、アドルノにとってハイデガーの哲学は骨の髄までファシスト的なんだということになると思います。アドルノがハイデガー哲学に備わっているファシスト的要素と見なしているものは、何よりもハイデガー哲学が向かいがちな基礎付け、ベグリュンドゥングです。そういう振る舞いです。

それは、例えば「存在」という概念が指し示す究極の一点または、第一原理において様々な学問を基礎づけて、世界を体系的に提示しようとする態度です。アドルノはそれを第一哲学とか根元哲学とか呼んでいます。

ですから、ある意味で先ほど行動主義の話がありましたが、行動主義の立場で一切を基礎づける、行動主義的原理でもって諸学を基礎づける、それでもって世界を体系的に配置しようとする、そういう立場がありうるとしたら、やはりアドルノはそれに対してもファシスト的だと

言っただろうと思います。そういう1つの原理、究極の1点、第1原理から世界を基礎づけた
り、様々な学問を基礎づけたり、体系的に把握しよう、配置しようという行動の志向というか
方向のもつ問題があります。ある1点、ある1つの原理でもって世界を基礎づけたり体系づけ
るという発想の場合は、全てを基礎づけ体系化するという装いのもつて、実はこの原理や体系
になじまない事柄はあらかじめ排除して隠蔽してしまうということとつながっているわけで
す。これは先ほど行動主義の問題について言われたものと同じことです。例えば行動主義的な
原理にそわないものは非科学的であるという形で排除する。行動主義とは別の原理をもつてき
たらそれはなくなるかという、必ずしもそうじゃないんです。何かある原理、1点から全て
を基礎づけたり、体系化したり説明し尽くすという態度そのものが、その原理が何であれ、常
にその原理になじまないものや体系におさまらないものを排除して隠蔽してしまう。そういう
傾向をもっているんじゃないかということです。

それに対してアドルノがあくまで守り抜こうとしたのは、先ほど「哲学のアクチュアリティ」
から引用したときに言いましたような、痕跡とか、破片として散在しているもの、散らばって
いるものに対するセンスだと言えらると思います。若い日のアドルノがブロッホやベンヤミンの
内に確認したのは、例えばこういうことになると思います。哲学の問題で言いますと、一見哲
学と異質な領域、そういう所の中にこそ哲学的思考の可能性が現に存在している。そういう発
想だと思います。もう少し具体的に言いますと、ブロッホとかベンヤミンは、例えば探偵小説
とか、バロック悲劇とか、あるいは音楽とか、写真とかパッサージュなどの中に可能性をさぐ
ろうとします。パッサージュとは、上に覆いのある商店街のことです。ベンヤミンの最後の作
品にパッサージュ論という大きな作品があります。これは私も翻訳者の1人で、岩波から5冊
本で出ていますが、そういう大きな仕事がありました。一見哲学とは異質な領域の中にこそ哲
学的思考の可能性が現に存在している。それは哲学に限らずいろんな形で言えることだろうと
思います。専門分野としての哲学ではなくて、個別の様々な専門分野の中でも言えることでは
ないでしょうか。そういう形で見いだされる思想の学際性あるいは総合性、つまり痕跡や破片
として散在している形での総合性、それはハイデガー的な意味での基礎づけとも違います。こ
れはハイデガーとも、行動主義とも違います。また既存のもの羅列でもありません。これは
いくぶんカリカチュアライズして、私たち自身のやった授業のことを紹介したやり方です。そ
ういう既存のもの羅列ともまったく異なったものであり、むしろ総合と言うよりは、逸脱と
か越境とかに近いかもしれません。そういう逸脱とか越境は、目的意識的に実現されるよりも、
はからずも生じてしまうような逸脱・越境であって、かろうじて後になって事後的に確認され
る総合性にすぎないかもしれません。それを再び方法論化するというのは、また非常に困難だ
ろうと思います。そういう方法論化を免れていくような、たえずはからずも生じてしまうよう
な逸脱とか越境です。後で事後的に「あっ、ここにある種の総合性ないしはその痕跡があるか
もしれない」というような総合性です。しかし、そういうふうにしてはからずも実現されてい

る総合性，あるいは総合性の破片とか痕跡，それに着目することこそが，アクチュアルな課題ではないかと思えます。私は，私なりの小さな，そして大学での授業とか研究のわずかな経験ですけれども，踏まえて考えていきたいと考えています。以上で報告を終わります。

司会 どうもありがとうございました。細見さんの報告は，ご自身の大学の体験などもふまえた上で，アドルノのハイデガー批判，そしてそれを通じてさらにアドルノによる総合化の批判，つまり個別的な領域からの逸晩ないし越境，むしろそういった中に見非哲学的に見える痕跡ないし破片としてのいわば総合性を紹介されました。そして，その原理によって全体を総合しようという態度を，アドルノはファシスト的と呼び，そういう意味では総合化に対する1つの立場を表明したというのが，報告の趣旨でした。このあたりにつきまして質問，ご意見ありましたらお願いします。アドルノの専門家はここにもいろいろいらっしゃると思うのですが。

橋本 先ほども発言した橋本剛です。大変興味深い話でした。総合化からの破片・痕跡ということですが，破片や痕跡の向こうに何が見えるのかという問題があると思えます。デカルトのというような不完全というのは完全性と対立するものです。そうすると，理念として不完全な現実の向こうに完全性を対置して見ざるをえない。しかし，完全性から戻ってくるときに，不完全なもの，合わないものを排除するということと必ずしも同じじゃないと思うんですが。

細見 とても大事でかつ難しい所なんです。それをたとえばユートピアという形で言うのも問題なんです。たとえば痕跡と破片というときに，ベンヤミンは，言語の問題もその痕跡と破片という形で考えまして，翻訳論の中で，ドイツ語とかフランス語とか日本語でもいいんですけど，文学は全て純粋言語の破片であるという考え方をしているんです。翻訳することにどんな意味があるかという，たとえばボードレーがフランス語で『悪の華』を書いたけれども，彼は必ずしも完璧な表現はできていないということです。なぜかという，それは不完全なフランス語という言語の中で表現しているからである。じゃそれはどうしたら完全な言語に変わることができるか。それは純粋言語で語られたらいいんですけど，直ちにボードレーの『悪の華』を純粋言語に翻訳することはできない。そのときにどういう形態がありうるか。つまり，それがフランス語・ドイツ語に翻訳することであるということです。

つまり，これはドイツ語がフランス語より完全な言語だと言っているのではない。少なくともフランス語とドイツ語は違う言語です。でも，あるフランス語の中で書かれた作品をドイツ語の中に移し替えることができる。その移し替えるという振る舞いまたはプロセスの中には，ある純粋言語の影のようなものがあるのではないのかという発想なんです。これも非常に微妙な問題です。では純粋言語があるのか，あるいはドイツ語とフランス語のある共通の何かから純粋言語が抽出できるのかを問われれば，ベンヤミンはやっぱりそれはできないと言うだろう

と思います。両方とも不完全な言語である、でも不完全な言語どうしの間で翻訳がなされる、この翻訳という行為の中には2つの不完全な言語を越えたある純粹言語の影があるという発想だと思っんです。だから僕も結局そこぐらいまでは言えるだろうと思います。

純粹言語があるとはなかなか言えないのです。それを積極的に取り出すことはできない。しかしドイツ語はフランス語にたしかに翻訳できる。それをイメージ言語的なものがあるのかと言ってしまうと、かなりカリカチャライズされてしまう。しかし、やはりドイツ語からフランス語へ、フランス語からドイツ語へあるいは日本語へ翻訳が現になされていく、その翻訳という営みや振る舞いは一般の僕たちが使っている言語を越えた何かを示唆している、そういうところだと思います。そのことは、その言語の翻訳だけではなくて、もう少しさっき言いました、個別領域の越境とか逸脱の中にもあるんじゃないか。でも何か純粹言語を実体的に想定した場合に、場合によっては非常にカリカチャライズされかねないような問題も同時にそこにあつて、あくまで緊張関係のようなものが同じように問われるのではないかと思います。

加藤 北海道女子大学の加藤精司と申します。質問と言うよりも、色々と大変興味深いお話を聞いて、感想をどうしても1言言いたいと思ひまして発言致します。ただ今アドルノとハイデガーを対比されたわけですが、私はフッサールの現象学を専門としている者です。確かにベグリュンデュングという言葉はヘーゲルが主でしょうけれども、現象学は非常にフンディールングという概念が好きです。いろいろと研究しているときには、アウフヘーベンとはどう違うのか、それから精神分析との関係ではどう違うのか、そういうようにいろんなことが問題になります。それからまた、ハイデガーがフンディールングを突き抜けるようなひとつの全景を示したということも良く分かります。それからまた、アドルノが非常にファシスト的なのだとそれを批判したことも分かるつもりです。

それから細見さんが、そうかと言って、ハイデガーの哲学がファシスト的だということで終わらないということを強調された。それも私良く分かります。別な例で言いますと、デリダという結構有名なフランスの哲学者がいます、もちろんユダヤ人なんですが、大変なハイデガー擁護者なんです。彼は普通の人々のハイデガー批判に対して非常に痛烈に反批判します。ところがデリダが言おうとしているのは、オリジンではなくて痕跡、連続ではなくて不連続、収斂ではなく分散です。彼はそれを元にして今までの西欧形而上学を批判しようとしています。それはやはりアドルノと妙に付合する所です、その彼がハイデガー擁護を展開する。これもまた非常に複雑です。細見さんの話を聞いていて少し前のことを思い出しまして、そう感じたしだいです。

その次は、人間科学の総合にかんする問題ですが、これは非常に批判的でまさにクリティシユな話でした。それぞれが個別的なことを扱いながら、そこで総合が問題になるわけですが、これにたいしてはアドルノの言う越境とか破片とかそういう言葉しかないわけです。それ以上

のことをさらに求めてその先がどうかというのは、アドルノとかそういう人たちは話にのってくれないと思います。まず何かあなたが個別作品をつくりなさいと言うぐらいじゃないかと思います。感想ですけれども、大変おもしろい話を聞かせていただきました。

圓岡 早稲田大学の圓岡偉男です。私は社会学をやっている者なので、アドルノについては非常に実証的な研究に関してしか分からないのですが、お話は大変おもしろく聞きました。たとえば逸脱と越境の中に可能性を見るとか、伝統を放棄しなければいけないとか、あるいは理性は基本的に破片の中に存在すると言われるときに、例えばアドルノはその逸脱とか越境の意義をそれがどのようないきさつであるときだけ認めただのかについて伺いたいと思います。例えば病的なもの全てが定義されたのかということについて、もう少し説明していただけないでしょうか。

細見 それはずっと今出ている議論の問題です。つまり、極端に言えば、やっぱりアドルノには芸術作品のイメージがあると思うんです。芸術作品というのは全て、優れた作品というのは全て既存のジャンルあるいはスタイルを逸脱したり、越境したりします。けれども、既存の約束を破っている作品が全て優れている作品と見なされるわけではないのです。そういう問題があると思います。

優れている優れていないというそういう尺度自体がどうかと思うんですけれども、優れている作品は、それ自体制度としての芸術とか、美的なものをどこか前提にした言い方ですから、しかし、僕はやっぱり成功した作品と失敗した作品があると思うんです。ただし、こうすれば作品は成功する、この研究は成功するというロジックがあって、それに従って書かれてうまくいく、そういうことはないと思うんです。これは芸術を例にして考えても良いと思います。ピカソの絵でもパウル・クレーの絵でも、こうだから優れているというのは事後的に言えることです。それが当初書かれたときには非常に直観的な要素もあるし、それから単に破壊的な要素もあるしということで、実際に社会からは拒絶されるということもままあったわけです。

ところが、何年か経てそれなりに定着したり、場合によれば全く評価されないものが実は成功しているすぐれた作品というのはいくらもあるのかもしれないけれども、ある伝統というものをつくられていくわけです。当初は非常に毀誉褒貶にさらされていた作品が、ピカソのこの作品は優れている、このボードレーの詩が優れているというように、ある評価が定まっていくプロセスがあると思うんです。その評価が全て正しいとはもちろん言えませんし、根本的に覆される可能性もあると思いますけれども、しかし、そういうものが事後的に発見されるんです。それはつくっている本人自身にあるのか、あるいは評論家またはつくっている本人が、そのときもっているインスピレーションを事後的に言語化して批評化するのでしょうか。そういう言い方ですむのかということとそうでもないだろうと思います。そのつくっている本人、表現

している本人にも分からないような逸脱で、批評のようなものがあって、事後的に成功した作品として確認されたりする。そういうイメージがあると思うんです。成功するハウツー的な逸脱の仕方とか越境の仕方とか、それはほとんど定義上語れないという所があると思います。でも、では何でも良いのかということではなくて、だからある種の批評とか言語が生きてくるのだと思います。批評が全部正しいわけではありませんけれども、様々な批評とかその作品について語るとか、あるいはその作品に対して別の作品を提示するとか、そういうプロセスがおこってくるのではないのでしょうか。それぐらいのことしか言えません。

司会 私もちよっと質問があるんですけども、今のベンヤミンの越境という概念に関して、アドルノのそういう発言は、彼がホルクハイマーとともに書いた、例の『啓蒙の弁証法』の中にあります。そこでは、近代の啓蒙は、神話の破壊・解体でありながら、しかし合理化一辺倒ということで、別な意味で後退としてとらえることがかえってまた別の神話を生んでいるという批判が行われます。そういう『啓蒙の弁証法』の論理がそういう統合化に対する見方につながっているのではないかと思います、どうでしょうか。

細見 そこは、『啓蒙の弁証法』自体が1つのジレンマに陥っているところでして、そういう総合化が1つの新しい野蛮を生むということを想像的に考えているところがあります。その辺が『啓蒙の弁証法』に示された、アドルノとホルクハイマーの思想自体のもっている、ある少しラフあるいはルーズな所でもあると思うんです。近代市民社会の批判が、同時に非常に広範なホメロス以来のギリシャ以来の歴史の批判という形になっているという問題です。いわゆるブルジョア社会はいつ始まったんだっていわれると、ホルクハイマーやアドルノは、極端な場合ギリシャ以来そうだということを言いかねない。つまり、近代ブルジョア社会というのと交換社会とはほとんどイコールという発想になっている所があるんです。そのあたりが本当に厳密に考えますと、とてもルーズな発想になっている。逆に言うと、どうしてもやっぱり包括的な思想の危険性というのを説く場合に、そういう説き方自体がある種の包括的な考えになって説かれる。そういう2重性みたいなものを抱え込んでいて、それが『啓蒙の弁証法』の大きな枠組みであると同時に、ハーバマスなどからずっと批判されるような構造でもあるわけです。

司会 それではもう時間がありませんので、細見さんのご報告はここまでにします。それでは続きまして、圓岡偉男さんからお願いいたします。

圓岡偉男「人間科学の行方」

圓岡 早稲田大学の圓岡偉男です。専門は社会学でございまして、主に理論社会学と呼ばれる